

六甲バター株式会社

汎用機から移行し基幹システムを刷新 基幹系・情報系データを一元管理

- POINT**
- 富士通の汎用機から移行し基幹システムを全面再構築
 - ビジネスロジックはRPG、フロントエンドはDelphi/400で開発
 - 専用コンポーネントによりDelphi/400の開発生産性を向上

COMPANY PROFILE

設立：1948年
本社：兵庫県神戸市
資本金：28億4320万円
売上高：358億7500万円(2009年度)
従業員数：420名(2009年12月)
<http://www.qbb.co.jp/>

長年の運用でシステムが複雑化 System iで再構築に着手

六甲バターは1948年、神戸の地に農林省指定のマーガリン工業を操業。その後1958年、オーストラリアから輸入した原料チーズをマイルドな風味のプロセスチーズに加工し、自社ブランド「Q・B・Bチーズ」として販売を開始した。

1960年には世界初のスティックチーズを開発。続いて1971年には日本

で最初のスライスチーズを販売するなど、プロセスチーズのパイオニアとして、身近な食品として日本の食卓にチーズを普及させることに大きな役割を果たした。現在もベビーチーズをはじめ、家庭用・業務用合わせて約300種類のチーズを揃え、チーズ専門ブランドとしては高いシェアを誇る。給食市場でも高い採用率を誇っている。

同社は30年以上にわたって富士通の汎用機を利用してきたが、2009年3月、主要な基幹業務システムについて「System i 520」へのリプレースを開始した。

「汎用機上で稼働していた基幹業務システムは30年以上前のコンセプトで構築されていましたが、長年にわたり部分最適を目的にした開発・修正を繰り返した結果、極めて複雑で分かりにくいシステムとなっており、かつ一部がブラックボックス化していました。またデータが基幹系と情報系に分散し、一元管理されていないため、必要なデータをタイムリーに提供できない点も指摘されていました。そのため運用管理性が低下し、新システムの構築も着手しにくい状況にあったのです」と、当時の状況を語るのは経営企画部情報システムチームの樋口修一課長・チームリーダーである。

汎用機上ではCOBOLを使って自社開発した販売・経理・給与・原価・資材管理の各システムが稼働していた。再構築に際しては、サーバーの選択肢をいくつか検討したというが、「長年、汎用機を利用してきたため、正直なところ信頼性に不安が残るIAサーバーへの移行にはあまり心が動きませんでした。System iの評判をかねてから耳にしていたこともあり、結局、汎用機に共通する安定性や堅牢性を備え、かつオープンなテクノロジーを搭載するSystem iの導入を決定しました」(樋口氏)

「RISE」と呼ばれる同社の基幹業務システムの再構築プロジェクトは2008年11月にスタートしている。

基幹システムの再構築手法については、COBOLプログラムのストレートコンバージョンや業務パッケージを含めて数種の手法を検討した。COBOLできめ細かく作り込んできた従来の機能性を踏襲する一方、Webなどの新しい要件に対応するため、システム導入を支援するアイ・ティ・フロンティアの提案を受け、ビジネスロジックはILE RPGで、GUIベースのフロントエンド側は「Delphi/400」(ミガロ)で新規に開発することを2008年末に決定した。



樋口修一氏
経営企画部
情報システムチーム
課長 チームリーダー



松末知和氏
経営企画部
情報システムチーム

まず着手したのは、販売系システムの刷新である。2009年2月から3カ月間で要件定義と外部設計、同年6月からの3カ月間で内部設計と開発を推進。さらに同年10月から順次、統合テスト、システムテスト、運用テストに着手し、2010年4月に無事本稼働を迎えた。RPGおよびDelphi/400の開発は、主にミガロが担当している。

また経理システムについては、パッケージ製品として「SuperStream/400」（ネスコ）を採用し、販売系より一足早く2010年1月に本稼働した。

Delphi/400で開発した販売系システムが稼働

Delphi/400は、HTMLやXSLを使ったページ生成、セッション管理、ユーザーログインなどGUIやWebアプリケーションを作成する多数のコンポーネントがあらかじめ用意されている点が特徴である。今回の開発ではこうした標準コンポーネントに加え、六甲

バター用の機能拡張を施した専用コンポーネントが20数種類用意され、さらに開發生産性を高める結果になっている。

初期開発は外部に委託したが、COBOL時代と同様、システムの修正・維持・管理は自社で実施したいと考えており、現在情報システムチームに所属する5名の開発者は、こうしたコンポーネントをうまく利用した開発スキルの習得に注力している。

「アイ・ティ・フロンティアやミガロ、などのパートナーと共同で開発することで、自社開発だけでは得られないノウハウを吸収できており、将来のシステム開発につなげられると考えています」（経営企画部情報システムチーム 松末知和氏）

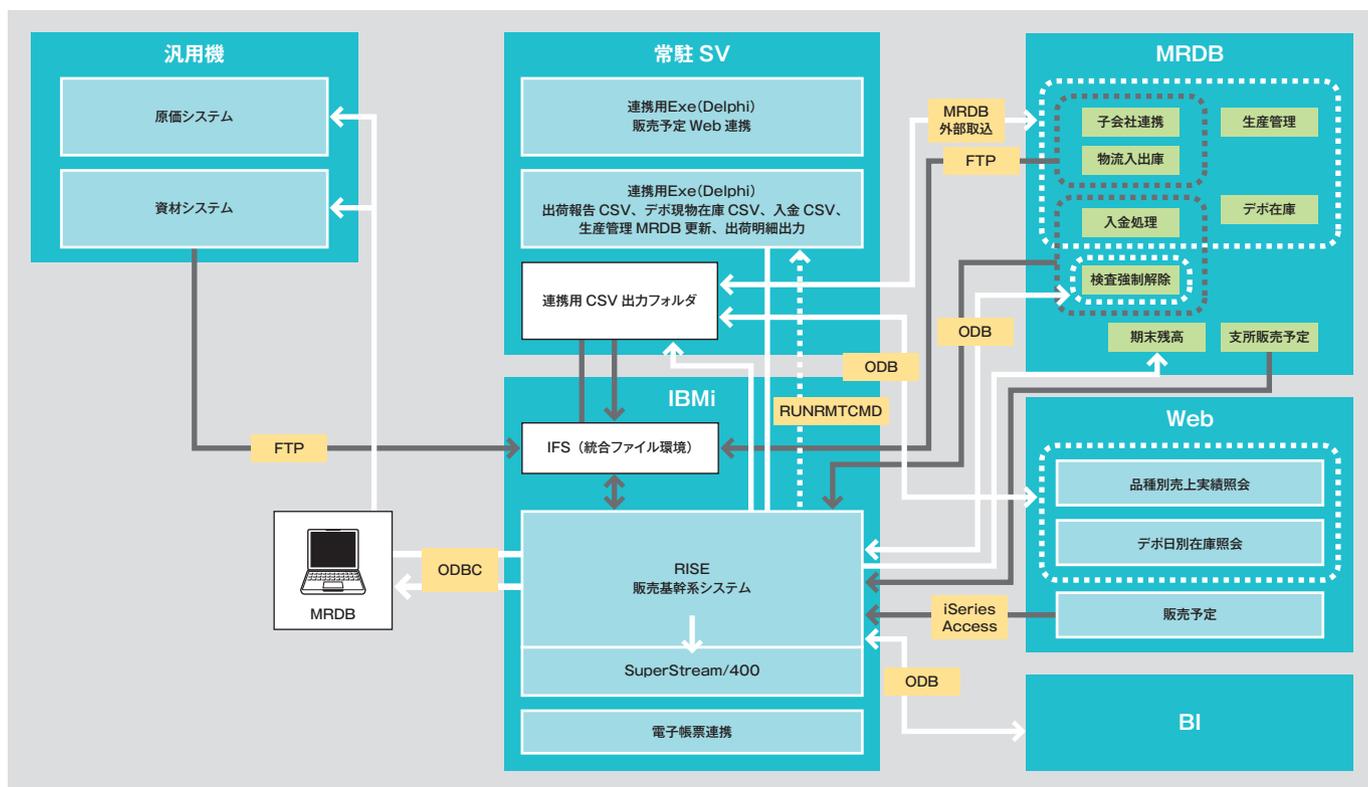
System iの導入により、従来60分を要していた請求関連のバッチ処理が5分に短縮されるなど、パフォーマンス向上の効果は大きい。しかしそれ以上に、リレーショナルデータベースを導入し、基幹システムと情報系シ

ステムを統合したことで、データを一元管理し、必要なデータをタイムリーに提供できる環境が整った点が最大の導入効果と言えそうだ。

今回の導入では、基幹側がDB2 for IBM i、情報系側はBIツールを導入し、データを管理しているほか、電子帳票、実績照会のWebアプリケーションなど周辺システムとのデータ連携が図られている。

今はまだ汎用機上で原価システムと資材システムが稼働しているが、両システムともSystem i上へ移行予定で、2012年3月末には汎用機を完全撤去する計画である。残る原価・資材システムは、全社を挙げて取り組んでいる業務改革プロジェクトと同期しながら、約1年半をかけてDelphi/400により再構築することになる。

System iへの全面移行が完了すれば、さらにデータの連携や活用、システム環境全体の運用管理性が向上することになりそうだ。



図表 RISEを中心とした社内システム連携